

変貌するインドの都市を多角的にとらえる：共同研究：南アジアにおける都市の人類学的研究

著者	三尾 稔
雑誌名	民博通信
巻	128
ページ	20-21
発行年	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10502/4569

プロジェクト

変貌するインドの都市を 多角的にとらえる

共同研究：南アジアにおける都市の人類学的研究

文・写真 三尾 稔

インドの都市の現在

インド経済の急成長ぶりは、日本のマスコミでも広く喧伝されている。経済発展を支え、またその恩恵を受けているのは、都市部を中心に人口が急拡大している新中間層である。収入が豊かになったこの層は、2000年代には、生存に必要な支出に追われるだけでなく、観光やファッション、健康産業やさまざまなイベントを楽しむという余裕をもてるようになった。2000年代のインドは、デリーやムンバイなどのメガ・シティだけでなく地方都市でも、また上流階層のみならず新中間層においても、本格的な消費文化の時代に突入したと思われる。多くの都市郊外には大規模なショッピングモールや瀟洒な集合住宅が次々に姿を現し、宅地開発が進行するなど、都市の景観も急速に変貌を遂げている。

都市の変容は、伝統的な社会の絆を断ち切り、新しい社会関係や共同体の出現につながる可能性をもつ。急速な経済成長と平行して1990年代以降インド政治の潮流を成してきたヒンドゥー・ナショナリズムのおもな支持層は

都市のヒンドゥー新中間層とされる。このような政治現象も消費社会化や社会関係の変容にともなうアイデンティティの不安にヒンドゥー・ナショナリズムが応えるというメカニズムが働いた結果と解釈できる。ヒンドゥー・ナショナリズムは、過激な現象としては、ムスリムやクリスチャンなど他の宗教信者への暴力や排斥的行動として現れる。90年代以降の異なる宗教信者間の暴力的紛争もまた都市を舞台とするものであった。都市社会の変貌は、このように暴力の拡大とも結びついている。また急速な都市の発展は、住環境の悪化やスラムの拡張、新興富裕層の成長と裏腹の貧富の差の拡大など、他のアジア・アフリカ世界の都市問題と共通する問題をもはらんでいる。

プロジェクトのねらい

インドの都市が大きな可能性と問題をもにはらむものである一方、その人類学的研究は、農村研究やカースト研究に比べて大きく立ち遅れている。また都市社会の伝統的な基層構造も明確にはなっていない。たとえば、インドの都

市はモハッラーとよばれる街区に区分されることが多いが、この街区の社会構成や社会関係のパターンはほとんど明らかにされていない。また都市形成の契機、都市の空間構成の特徴、インド的な都市文化の特徴、あるいは都市が地域社会のなかで担ってきた機能などといった、都市の過去をとらえ、将来を考えるための基本的な事柄についても、断片的な研究はあっても総合的な研究はほとんどおこなわれてこなかった。インドの都市の変化や将来的な課題について考えるためにも、インドの都市の基層構造を文化人類学にとどまらず、歴史学や地理学などの専門的研究者と協力して学際的・総合的な観点から解明することが必要である。またその際インドの歴史的な位置づけからして、南アジア地域全体に視野を広げ、都市の特性を幅広く理解する必要がある。

この共同研究は、南アジアの都市とその人類学的な研究の現状をふまえ、都市の基層構造を解明しつつ、その変容の方向性を測定する、という2つの目的のもとに開始された。

プロジェクトの構成

上記の問題の解明には現地調査が不可欠であるし、これまでの研究動向からみても人類学の隣接諸分野との学際的な協働が必要なことも明らかである。現地調査の遂行のためには、筆者を代表として日本学術振興会から科学研究費を獲得し(基盤研究(A)(海外学術)「南アジア地域における消費社会化と都市空間の変容に関する文化人類学的研究」平成17年度から20年度)、本共同研究プロジェクトと密接に連動させるかたちをとった。また、この科研究費研究にも、本プロジェクトにも、人文地理学や歴史学、考古学、建築学、地域研究等の研究者に参加してもらった。ヒンドゥー教の聖地として古代から発展する一方、染織を営むムス



旧市街の雑路。狭い街路に商店や住居が建ち並ぶ。(ウダイプル市2006年8月)



新市街の住宅。計画道路にそって建設された集合住宅が人気を集めている。(ウダイプル市2006年8月)

リム職人が中世から集住することでも知られるワーラーナシー（ベナレス）などでは、人類学と建築学の研究者が共同で調査をおこなうなど学際的な研究も実を結んでいる。調査は南アジアの20を超える都市で実施され、聞き取りや文献調査などを通じて都市に生きるさまざまな階層の人びとの経験に迫った。それにもとづき本共同研究では、以下の4つの視角を設定し、調査によって得られた具体的な都市誌を報告し討論を重ねてきた。

1) 都市の空間構成の特色

考古学や歴史学の成果もふまえ、西欧やイスラーム世界の都市との比較も視野に入れて、都市の住み分け方や、集住した人びとの生活を支え秩序づけるための施設の配置といった空間構成の特色を考える。またチャンディーガルやガンディーナガルなど、現代インドの計画都市や大都市の郊外の調査にもとづき、南アジアにおける近代的都市計画の思想を解明する。

2) 南アジアにおける「都市らしさ」の解明

インドを含む南アジアの農村は均質な人びとが集住する共同体ではなく、カーストによって差異化された人びとが住む空間であった。また小規模ながら市場的機能をそなえた農村もみられた。住民構成のヘテロ性や市場機能などは南アジアの都市性の指標とはなりえない。すると南アジアの都市性はどこに求められ、それはどのように変容しているのか。都市と農村の対比やネットワークの調査を踏まえ、南アジアの都市性を中心性・聖性・開放性などの観点から究明する。

3) 都市を生きる経験

現代南アジアの都市を人びとがいかに住みこなし、社会的に意味のある空間としているかを



旧王家が庇護してきた寺院の山車行列に参集する人びと。旧王権は都市住民のアイデンティティ形成に今も影響を及ぼしている。(ウダイプル市2007年7月)

考える。このテーマは、さらに大別して2つの観点から論じられた。その1つは、都市を生きてきた諸階層のエージェンシーに注目し、その経験や都市観に語りや記録などから迫るといふ観点である。もう1つは、都市的な構造や社会組成を基盤として展開するローカリティのあり方やその再編成に、都市住民の社会的活動を通じてとらえるという観点である。

4) 都市における宗教とアイデンティティ

南アジアにおいて宗教的アイデンティティをめぐる紛争が主として都市を舞台に大きな問題となっている現実をふまえ、都市空間における宗教的実践の変容、新しいライフスタイルと宗教の商業化、宗教運動と都市住民のアイデンティティなどの観点から現代南アジア都市における宗教の意味を探る。

と南部で都市空間の構成に地域性が見いだせる。近代的な都市計画の介入により、このような地域性が特に都市郊外において見られなくなる一方、郊外という新しい社会生活条件での暮らしにおける伝統と近代の葛藤が、暴力やナショナリズムの興隆と密接に関連する。郊外、旧市街を問わず新中間層の住民運動がさまざまな形で活発に展開しているが、これが異宗教徒や下層住民の排除にもつながっており、これに對抗するような運動も姿を現している、などの知見が得られている。

今年度はこれらの成果のまとめと公開に向けさらに討論を重ね、それをふまえて来年度早々に国際シンポジウムを開く予定である。このシンポジウムはエジンバラ大学南アジア研究センターと連携し、インドや英米の研究者を民族学博物館に招聘して、上記の4つの観点にそった枠組みのもとで開催する。研究の成果を国際的に発信し、問題意識を共有する内外の研究者とのディスカッションを深めて、研究のさらなる発展を期したい。

成果のとりまとめと公開に向けて

本プロジェクトも、連動する科研究費のプロジェクトも、最終年度を迎えている。これまでの研究によって、たとえば、南アジアの旧市街の都市的空間の編成には王権と宗教が重要な要因となってきたが、王権の性格や基層となる宗教の相違によって旧市街の空間構成や社会関係に相違がみられる。特にイスラーム文明の影響の濃淡に相関して、北部



郊外に次々出現するショッピングモールは、新中間層の旺盛な消費意欲の象徴である。(アーメダバード市2007年9月)

みおみのる

研究戦略センター准教授
専門は、インドの文化人類学
著書に、『インド 刺繍布のきらめき』（共著 昭和堂 2008年）、論文に“*Young Men's Public Activities and Hindu Nationalism: Naviyuvak Mandals and the Sangh parivar in a West Indian Town*” (David N. Gellner (ed.) *Ethnic Activism and Civil Society in South Asia*. Delhi: Sage, 2009) など